

心理臨床における枠と関係の多層性

——教育機関臨床を通じて——

甲南大学学生相談室 長谷雄太

I. はじめに

心理職の職務の内、最も主要な業務の一つとして“相談”が挙げられる¹⁾。この“相談”は臨床心理学の分野において“心理療法”や“カウンセリング”などと表現されることが多く、十分な専門性が求められる。本論では以降、心理的な相談業務全般をカウンセリングと統一して呼称することとする。

カウンセリングの場では、そこに訪れる人（以下、クライアントとする）にとって、外部に漏れてはならない数多くの事柄が語られたり表現されたりする。それらが漏れることを避けるために、カウンセリングに携わる者（以下、セラピストとする）は、カウンセリングの場を一定以上外側から閉じた状態に保つ必要がある。また、日常とは異なるものとしてカウンセリングの場に特有の区切りを入れることが、クライアントのところに治療的あるいは治癒的に作用するうえで有意義であることは、多くの心理臨床家によって論じられて久しい(河合, 1999; 小此木, 1990)。こうした治療・治癒的な設定のことを、臨床心理学では「枠」と呼ぶ²⁾。こころの支援を行う上では、こうした枠を担保しつつその内側で起こる出来事に目を向け続ける必要がある。

一方でセラピストには、枠の内側へのまなざしと同時に、枠の外側に開けた姿勢が求められる。2017年に公認心理師法が施行され、日本における多くの心理的支援に携わる人々が公認心理師という国家資格を取得した。日本心理研修センターによると、2022年9月末日時点で公認心理師の登録者数は57,645人で、1988年より財団認定資格とし

て存在する臨床心理士資格の登録者数を大きく上回っている³⁾。こうした流れの中で、専門家としての心理職の存在は様々な領域において、広く認知され始めている。そしてそれは同時に、心理職以外の職種からのアクセスの増加が起こることに繋がる。事実、公認心理師法第42条⁴⁾に掲げられている通り、他職種との必要十分な連携がこれまで以上に求められることとなった。このように近年では、人のこころを支援していくという営みそのものを心理職のフィールドのみに留めるのではなく、外側に開けたものとしても展開していく必要性がより高まっていると考えられる。

心理臨床の実践の場では、こうした外側に開けていく姿勢と、枠の内側を重視する姿勢の、一見矛盾した在り方について常に問い続け、アップデートしていく必要がある。特にカウンセリングという営みにおいては、枠の外側だけに目を向けすぎるとはクライアントの内面の動きを捉え損なう可能性があり、枠の内側だけにこだわることはクライアントにとって適切な支援の機会を奪ってしまう危険性も孕んでいる。さらに、“枠の外側”も一括りにできるものとは言い難く、その環境は多種多様で、時勢や様々な要因によって変化しうるものである。茂木(2003)が福祉領域における特有の枠の難しさについて論じているように、カウンセリングが行われる領域によっても心理職の枠に対する姿勢は異なってくると考えられる。そして近年、新型コロナウイルス感染症の影響もあって、オンラインでの関わりが急激に増加するなど、社会的に生活環境の大幅な変化が起こっている。これは、カウンセリングの枠の外の環境で

起こっている変化に留まらず、オンラインでのカウンセリングのニーズが高まるなど、枠の内側についても変化を余儀なくされる出来事であった。こうした機会に、改めて心理臨床場面における枠の持つ意義について見直し、ニューノーマルな枠への姿勢について検討することは、心理職が時代のニーズに合わせて活動していくうえで不可欠な営みであろう。

本論ではまず、臨床心理学の観点から枠についての理論をまとめ、臨床実践の現場の中でもスタンダードな枠を持ちづらいとされる学生相談やスクールカウンセリングといった教育機関臨床を中心に、現代の心理臨床において枠の在り方や枠の“外”と“内”をセラピストがどのように捉えていく必要があるか考察する。

II. 枠の意味するもの

1. “枠”という言葉

そもそも一般に、枠という言葉はどのようなことを意味するのだろうか。“枠”という漢字は漢語の“わく(篋)”⁵⁾に由来する国字とされるが、その正式な語源は定かではない。字としては、木編に“卒”の略字である“𠂔”が組み合わさったものである。“卒”は“卒業”という言葉にも表されるように、“締めくくってまとめる”という意味を持つことから、枠は“締めくくって、一つのまとまりを作るもの”というニュアンスを持つ会意文字であると考えられる。枠の辞書的な意味は「まわりをふちどって囲むもの」「物事をふちどるような、定まった型。制約。限度となる基準」(西尾他, 2019)であり、漢字の成り立ちも踏まえると、物や出来事をまとまりのある状態に括り上げる作用を持った型や構造を総称する言葉と言えらる。また、枠を英語に直訳すると“frame”となるが、これは古期英語の“framian (fremian)”から派生しており、「役に立つ」や「成す」という創造的な意味合いの強い単語である(小島, 2012)。このように語源を辿ると、枠は単なる

物体として生成されるものを指すのではなく、何かを生み出す作用を持つものとして扱われてきたことが分かる。枠がこうした創造に関わる意味を持っていることを踏まえると、枠が“底から生じる”という意味の“湧く”と同じ音を持っていることも興味深い。

ただ、あくまで枠は構造の一部であることも重要な点であろう。物事は枠が無くては成立し得ないが、枠だけで成立するものとも言えない。これは、枠という言葉が用いられる際に、一般化して言えることだと考えられる。

2. 臨床心理学における枠

では、臨床心理学という分野において枠はどのようなものを指し示すのか。河合(2013)は枠を「心理療法の場づくりのための具体的な方法」と定義しており、カウンセリングにおける枠が指すものは主に「時間、場所、料金」であると述べた。河合とは学派を異にする鑑(1998)も、枠を「面接関係やセラピスト・クライアント間のコミュニケーションのあり方を規定する、心理面接の基本的で恒常的なルールや要因」としており、対象とするものがやや広いものの概ね共通している。そして河合は心理療法を「クライアントが主体的に問題を解決するために、場や拠り所を提供することである」と定義するなど、時間・場所・料金といったその場を規定する枠はカウンセリングや心理療法という営みの本質に関連するものと考えられている。では、枠はどのような要素を持ち、どのようにクライアントのこころに対して治療的あるいは治癒的に作用するのかについて、ここではいくつかの観点をもとに理論を参照する。

① 外的な枠—時間

まず時間について、日本では週に1回50分という枠がカウンセリングについてスタンダードなものとして扱われることが多いだろう。確かに週に1回50分という時間枠は日本人の生活サイクルに

マッチしており、この時間の長さや頻度にも一定の意味を見出すことはできるが、それ以上に時間を区切るということがカウンセリングにおいては重要視される。カウンセリングの時間を一定の時間に限定することについて河合（1999）は、Leach（1961）の「聖なる時間と俗なる時間」についての論考をもとに、面接時間を一定に限定することで時間の「かけがえのなさ」を明確にして面接の密度が高まると同時に、クライアントはそれが「くり返し可能」という時間の二面性を体験すると論じている。このような時間の限定を経て、カウンセリングの場は単なる日常の一部を切り出したものではなく、非日常的な性質を帯びることとなる。また、時間を区切ることは、クライアントにとっての体験を濃密なものにすると同時に、セラピスト側の安定した姿勢にもつながる。実際、いつ終わるともわからない状態で話を集中して聞き続けることは非常に難しいが、時間を限定することはセラピストが十分に聞き切ることを可能にする。これは、話に耳を傾けることへの限界点として、学校教育における（大学を除く）授業時間が概ね50分程度に設定されていることなどにも通じるであろう。

② 外的な枠—空間

そして、カウンセリングはその場所によっても枠づけられる。当然、カウンセラー以外に話が漏れ聞こえない閉じた部屋でカウンセリングを行うことは、クライアントにとって重要な秘密が必要以上に明かされること防ぎ、直接的にクライアントを守ることにつながる。さらにそうした保護的な意義以外にも、河合は山口（1969）のカーニバルの祝祭空間についての論考を援用し、時間の枠に加えて閉じた場所を設定することが、クライアントの内界が豊かに表出されやすくなることを指摘している。心理臨床において閉じた場を用意するという行為は、カウンセリング以外の場でもしばしばみられ、描画法における枠づけもその一つ

である。中井（1974）は、統合失調症の患者が箱庭を作る際に砂箱の内側をさらに柵で囲ってからその中に作品を作るプロセスに着目し、描画を実施する際に白紙に枠を付ける方法を考案した。実際にこの枠づけ法が適用される風景構成法などでは、こうした枠づけを描き手の眼前で行うが、これは描き手の表現を保護する効果と表現を強いる効果があるとされ、この二つの効果によって描き手はより深い自己表現が可能となり、作品に内面的な欲求や思考が現れやすいとされる（皆藤、1994）。さらに森谷（1983）は、枠づけされたバウム・テストと、そうでないものを比較する研究で、枠づけされているバウムの方がより内面的表現が促進されたことを示している。こうした知見は先に述べた、枠という言葉の本来の意味が示す、枠そのものがそこに何かを生み出す作用を持っているということと通じ、まさにその内側にこころに関わる何かが“湧く”のである。そうした意味でカウンセリングでは、さまざまな形で空間的な区切りをいれることによって、クライアントのこころに動きや、時にはこころそのものが生まれ出る場を整えていると考えられる。

③ 外的な枠—料金

もう一点、外的な枠を構成する主要な要素として、カウンセリングの料金が挙げられる。カウンセリングは職業的な営みであり、カウンセラーが「疑似聖職者」（河合、1999）にならずに、俗の世界にある程度根差しておくという意味でも料金徴収が行われる。同時に、料金を支払うことによって、クライアントが気がねをすることなく自分の感情や意思を表現しやすくなる。皆藤（2007）が、「現代では、特に料金を払うからこそ個と個の関係が明確になって、語りたいたことが語れるという感覚がそうとうに浸透してきている」と述べたように、クライアントの内的な世界が表現されることを重視するカウンセリングにおいて、表現のしやすい場を整える重要な要素と言える。この料金

の高低については機関やセラピストによって差があるが、クライアントの生活を保ったうえで、有効な枠として一定の緊張感や語るに足る十分な料金を支払ったという感覚をクライアントが持てる設定を模索する必要があるだろう。そして職業としてカウンセリングを営む機関やセラピストが、報酬として必要十分なものとして捉えられることも、セラピストとしての姿勢を保っていくうえで欠かせない要素だと言える。

④ 内的な枠—セラピストの態度

ここまで、具体的にカウンセリングの場を規定するものとして時間、場所、料金を挙げてきた。これらは、数多くあるカウンセリングの学派の中でも、枠を構成する重要な要素として概ね共通するものであろう。ただ、精神分析ではさらに転移の取り扱いなど、セラピスト—クライアント間の関係を「拠り所」として機能させる手法を用いることもあり、枠（精神分析の文脈だと「治療構造」）について「時間、場所、料金」を「外的構造」としたうえで、匿名性や中立性、禁欲原則と言ったセラピスト側の態度を「内的構造」として捉えることが多い（山崎, 2021）。山崎はこうした点について、小此木（1990）や上田（2020）の論考を基に、精神分析では「いかに治療者がよく機能するか」を重要視することに着目した。そして、精神分析においてセラピストはカウンセリングの結果を左右する重要な変数であり、セラピストがカウンセリングにおける一つの「道具」であると述べている。匿名性や中立性、禁欲原則といった基本的態度はFreud（1918/1970）が提唱したものだが、これらは要約するとセラピストとクライアントの間に生じる転移関係を映し出す「空白のスクリーン」としての役割を、セラピストが適切に担っていくために必要な姿勢であった。こうした姿勢は、時間・空間・料金のように目に見えたり測定出来たりする具体的なものとは異なる。ただ言い方を変えれば、転移関係が発生する“枠”を整えるた

めにセラピストの姿勢が貢献するのである。さらに、“空白のスクリーン”が枠であると考えれば、“空白のスクリーン”の役割を果たすセラピスト、つまりは“人”こそが一種の枠であるとも言えるだろう。特に精神分析理論において、“人”はこころの動きが生まれる「場」の一部となり得る。そして、山崎（2021）が「内的構造」の視点自体はどの学派でも保持すべきものとしたように、学派を超えて適用し得る有意義な論であると考えられる。

⑤ 内的な枠—契約とプロセス

最後に内的な枠の一つとして、カウンセリングにおける契約とプロセスの構造化を挙げる。カウンセリングにおける契約については、ここまで述べてきた外的な枠についてセラピストとクライアントの間でどのように共有するか、という点が重要となる。鎌・名島（2000）はカウンセリングにおける枠の設定について「セラピストとクライアントがよく話し合うことが重要である」としたうえで、「面接の枠組みを共有することで、面接関係が目的をもった専門的な援助関係であることが両者に自覚される」と述べた。このように、外的な枠がある程度設定された状態で共有や取り決めが行われることで、目に見えて測れる枠としてだけではなく、セラピストとクライアント双方にとって内在化された枠組みが成立すると言えよう。

また、カウンセリングのプロセスそのものを枠として機能させる場合もある。認知行動療法では、時間や頻度などがあらかじめ設定されているものも多く、そもそもカウンセリングのプロセスそのものがかなり構造化されている。田中（2021）は「認知行動療法においてはクライアントとセラピストが協同して治療構造や設定を構築していく作業を行うことこそが治療的な構造に繋がる」と述べ、認知行動療法には「治療構造しかない」としている。このように、カウンセリングを行うために枠

を設定するのではなく、枠を作り上げていくことこそがカウンセリングの一環であるとし、外的な枠とは別に、本来枠の内側にあるプロセスをある程度固定化した枠として成立させることも、一つの技法として扱われるのである。

Ⅲ. 枠を作り、体験するということ

1. 枠の持つ二面性

ここまで枠の理論について、臨床心理学の分野において主要なものを取り上げてきた。外的なものから内的なものまで、枠を構成する要素は様々ではあるものの、枠こそがカウンセリングを専門的な営みとして成立させており、枠の全くないカウンセリングは存在し得ないといっても過言ではないだろう。それは、1対1で椅子に座って話し合う形態のカウンセリングのみに当てはまるものではなく、子どもと遊びを通じて関わるプレイセラピーや、集団で行われるグループセラピーにも通底する枠の在り方であると言える。そして総じて、枠は文字通り“分く・別く”ものとして機能し、日常との間に境界を生み、その内側にこのころの動きが生じ得る空間を生み出す。このことについて、栗原（1992）は枠に「セラピスト・クライアント双方の存在とその関係とを支える受容器としての機能」があるとしている。このように、枠は器として例えられることも多く、Jung（1944/1976）は錬金術において器（フラスコ）の中で発生する変化とこのころの変化を重ねて論じている。制限をするがゆえに自由が生まれるという論は一見パラドキシカルにも感じられるが、この器の持つ守りの機能が前提になっていることは間違いないだろう。

しかしこうした枠の機能には、人のこのころやこのころの表現を保護するがゆえに、かえって深いものを露出させてしまうという側面もある（田罵、2003）。つまり、枠の表現“させる”機能に重きを置きすぎると、クライアントのこのころがむき出しになって、傷つきを生む可能性がある。神田橋

（1990）は枠について「セラピストが揺らぎを抱える態度を示し、また揺らぎを抱える治療枠を作り出す必要がある」と述べ、坂井・松下（2009）は「セラピスト側の枠の設定と提示は、セラピストがクライアントとの面接に必要な基本的な枠組をどう考えるかに加え、相談機関やセラピストが置かれている状況、問題を扱う準備態勢やキャパシティをも反映し、加えて、その枠の提示や顕れを、クライアント側が心的リアリティとしてどのように受け取るかという面が重要となる」として、Winnicottのholdingの理論をベースにカウンセリングの抱える機能について論じている。つまり、カウンセリングにおいて生じるクライアントの揺れや動きに、枠は対応できるものでなければならない。もし枠が、カウンセリングの始まった際に設定されたものから変えることのできないリジットなものであるとすると、枠内で生じるクライアントのこのころの揺れや動きに、枠の側が耐えきれず破綻してしまう可能性がある。

そのため、心理臨床においては、本来枠の持つ“制限し、範囲を定める”という働きを維持しつつ、ある程度可変的な在り方をするというジレンマを常に抱え続けなければならない。

2. “柔軟な”枠

枠の二面性を念頭に置くと、リジットであることと可変的であること、どちらに寄りすぎても上手くいかなくなるのが予想される。ただ、枠の機能を前提とすると、まずはリジットな枠を守ることにそもそも意識が向きやすい可能性がある。実際、臨床心理士・公認心理師の養成・訓練では守秘義務のような枠を初めとして、まずは“枠を守る・保持する”ことを求められ、理論としてもそう学ぶことが多い。ただ、そもそも固定化された枠組みそれ自体が具体的に明瞭なものも多く、セラピストが一人の人間としてそうした“わかりやすさ”を手放し難くなることもあるだろう。そのため、実際のカウンセリング場面では、むしろ

リジットな枠への意識から少し離れ、枠の可変性にも目を向けるような姿勢の転換が、結果として求められる場面が多いのではなからうか。

こうしたリジットな枠からの転換は、“柔軟な”枠への取り組みでもある。前項で述べたように、過度にリジットな枠は枠側がクライアントの揺れや動きに耐えられなくなる可能性を持つと同時に、求められたままにクライアントを理論の枠に押し込むことを Jung (1937/2018) が「治療という名のこころの殺害」としたように、クライアントの内から湧く本来的なニーズを無視することにもつながる。ただ形式的にカウンセリングの場に取り入れられた枠は生命力に欠け、クライアントの有機的なこころの動きを損なうのだ。

こうした問題を踏まえ、岡野 (2008) が諸理論から「治療的柔構造」を提唱したように、枠の柔軟さの必要性については論じられて久しい。日本における枠の認識に関わる理論のうち、最も有名な論考の一つとして小此木啓吾の「治療構造論」(小此木, 1990) が挙げられる。治療構造論も、枠付けを強固にすることを示唆する論考とは異なり、カウンセリングの枠がプロセスに与える影響を検討するものである。山崎 (2021) は治療構造論を、「構造のもたらす効果をメタ的に考える認識論」とした。つまり、枠が“こうあるべき”ということをはっきりと示すものではなく、いかに“べき”という視点を崩すことが治療構造論の要点とも言え、セラピストの柔軟な姿勢を前提としたものである。このように、一定の形態を保ちつつクライアントのニーズに合わせられる柔軟性を持った枠は、臨床心理学の分野において大きなテーマであった。セラピストが実際に柔軟な枠づくりを実践できるかはまた別の問題として、カウンセリングや臨床実践全般に関して“リジットな枠組みでなければならない”という観念は、もはや一般的とは言い難い。

3. 枠を破ること

カウンセリングの場面では、枠を保持することで生まれる効果以外にも、河合 (1990) が「原則を破ることによってこそ治療関係が保たれたり、好転したりすることがある」と述べたように、時にはクライアントが枠を破ることそのものが必要なことがある。そもそもカウンセリングは、クライアントの変化に立ち会う営みとも捉えられる。そして、変化をするということは、もともと存在していたまとまりが一度崩れ、新しいまとまりが生じるということでもある。つまり、カウンセリングの中で変化が起こるとするのは、クライアントに関わる何らかの枠が一度破られることが前提となっているとも考えられる。そうした意味で、枠を破ること自体は新たなものが創造されるための重要なプロセスで、Jung の言う「死と再生」に類するものであろう。語源の話に遡るが、枠という字を構成する「卒」という漢字は、死者の衣の下部のひもを結んで閉じた形から作られたとされる (白川, 2000)。死者の衣を閉じることには霊の出入を禁ずるという意味があるが、この禁を破らねば霊は解放されず、新たな展開には至らないとも考えられ、枠という語は非常に深く心理臨床に根差した言葉であることがうかがえる。

しかし、ただ枠を破ればよいということではない。村瀬 (1981) は「治療構造、制限をただひたすらに当然のこととして安易に守るのではなく、個々の患者の治療目標、そのときの状況に合わせて、制限のもつ本質的意味を問い直し、制限をあえて超えるということによって生じる構造規定的な緊張関係のなかから、予期しない新たな治療的展開が生ずる場合もある」と述べている。このように枠を破る行為は創造的な結果につながり得る一方で、村瀬が「あえて」と述べているように、その過程にはリジットな枠の持つ意味の理解と、枠への柔軟な姿勢が十分に必要であり、枠を超えるための準備と相応の覚悟が前提となる。そうした準備がないままに枠が破られることは、クライ

エントのなまのところが安易に晒され傷となったり、カウンセリングの場そのものが回復不可能なまでに崩れたりする危険性がある。

ここまで述べてきたように、セラピストはリジットな枠の持つ意味を十分に理解し、その上でクライアントのニーズや枠の与える影響を考慮した上で枠に柔軟性を持たせ、必要な場面ではその枠を超える動きをあえて容認することが求められる。では、実際の臨床現場ではこうしたプロセスはどの程度実現可能なのであるか。

IV. 臨床実践における枠—教育機関臨床を中心に

1. 臨床実践への枠の適用

前節では、カウンセリングにおいて枠がどのような役割を果たし、セラピストはそこにどのように関わる必要があるのかについて、理論を参照しながら検討した。本節では、心理職が関わる実践現場において、枠の理論がどのように適用されるのか論じる。

公認心理師法において、心理職の職域は主に医療・教育・産業・福祉・司法とされている。はじめに述べたように、資格の成立や時勢から心理職の現場も拡大したことは間違いない。ただ、こうした領域の中で働く場合、心理の専門家のもとにクライアントが訪れるのを待つというよりは、心理職であるセラピストがクライアントのいる場に参入するというニュアンスが強くなるのではないかと考えられる。この場合、特に医療以外の4領域について、それぞれの領域はカウンセリングを専門とする場ではなく、カウンセリングのための枠が無いことも多いであろう。実際は、各領域に心理職が参入してから年月が経ち、それぞれの領域に臨床実践を行っていくための枠が形成されてきてはいるものの、やはりその在り方はこれまで述べてきた理論で学ぶような枠組みとは異なることが多い。

例えば福祉領域における臨床実践において、茂

木(2003)は訓練機関で学んだ枠の実現し難さについて論じている。福祉領域のように、施設内でカウンセリングのような関わりを行う場合、「日常に非日常が侵入していく」(茂木, 2003)形になる。その他にも、施設内の職員同士の関係等も多分に影響するなど、スタンダードとされていた非日常空間に“通う”形態とは大きく異なる。こうした難しさは、少年院や刑務所など司法領域の施設内臨床にも共通することかもしれない。このように、臨床実践の場においてカウンセリングを行う場合、スタンダードな枠の理解だけでは適応が難しい。まずはそれぞれの領域の特徴を理解し、セラピスト自身のカウンセリングに臨む枠組みをアップデートしていく必要があると言えるだろう。

2. 教育機関臨床における枠

福祉や司法のような施設内臨床を行う領域と並んで、教育領域は枠に対する姿勢についての議論が盛んである。教育領域における心理職の活動は、大学における学生相談や小学校・中学校・高等学校におけるスクールカウンセリングが主なものとして挙げられる。これらの現場は実際、どのような枠の難しさを持つのだろうか。本論では、小学校・中学校・高等学校・大学を総称して“教育機関”と呼称して論を進めていく。

① 学生相談・スクールカウンセリングにおける枠

スクールカウンセラー配置事業は2001年度から本格的に始まり、学生相談は半世紀以上前から導入され始めるなど、教育機関に心理職が参入してからいくらか時間も経過している。現在では、心理職が勤務するほとんどの教育機関において、面接が可能な部屋が用意されていたり、その存在が周知されていたりと、十分とは言い難いにせよ、初期に比べると枠も整えられていると言えるだろう。

一方で、教育機関に特有の枠の難しさも見受け

られる。まず時間については、学生はそれぞれの機関のカリキュラムを前提に学生生活を送っている。そのカリキュラムによっては、枠の変更を余儀なくされたり、定まらなかつたりすることは頻繁に起こり得る。加えて、卒業という現実的な期間の限定もある。また、空間については施設内臨床同様に、学生にとって日常の中にカウンセリングの空間が位置付けられることは大きな特徴と言えよう。ただ施設のような居住の場とは異なり、教育機関はあくまで“通う”場である。日常に近い場ではあるものの、施設に比べるとカウンセリングの場の設定に配慮をすることによって、空間的な枠は保持しやすいと言えるかもしれない。そして料金について、セラピストは各教育機関や自治体などから給与をもらうが、基本的に学生から直接徴収することはないだろう。この時点で、外的な枠はスタンダードとされる状態を既に保持しづら。

さらに、教育機関はその規模が大きく、構成員が多いことも特徴の一つとして挙げられる。実際、教員や事務職員の方が心理職よりも圧倒的に数は多いであろう。文部科学省は2015年から「チームとしての学校」を重視した方針を提示しているように、他職種に開けた姿勢が強く求められる現場とも言える。当然、連携によってできることの幅が広がり、学生に対する細やかで行き届いた支援につながることは多く、それ自体は望ましい。ただ、カウンセリングの場面においては、職種間連携に伴って守秘義務を含めたカウンセリングの枠をどう閉じた形でクライアントと共有していくかが大きな課題となることもある。そして規模が大きいということは、それだけ機関そのものの雰囲気や制度にカウンセリングの場が影響を受けやすいということでもある。特に大学などは、大学ごとの雰囲気や方針の差も大きく、多くのことについて一律で“こうあるべき”としづらい面もあるだろう。

こうした状況も踏まえて、特に学生相談の領域

などでは、枠がゆるやかにならざるを得ないことがしばしば論じられてきた（山木, 1990；齋藤, 2002）。伊藤（2017）は学生相談カウンセラーが体験する「難しさ」について質的な研究を行い、学生相談がもつ多様性や構造の在り方や他職種など“外”との連携への戸惑いや困り感が先行研究とも共通して語りとして現れることを指摘した。スクールカウンセリングにおいても、神代（2015）によるカウンセラーへのインタビュー調査で同様に枠の設定や“外”との連携への戸惑いがカテゴリとして抽出されるなど、スタンダードとされる枠の在り方との乖離は多くの心理職にとって支援の難しさに繋がっていることがうかがえる。

② 枠の概念の拡大

一方で特に学生相談の領域では、そうした教育機関特有の枠の緩やかさを弱点とするだけではなく、学生相談ならではの枠の在り方を活かした支援につなげていく考えも多く見られる（樋口, 1981；三浦, 2020）。先述したように、教育機関はクライアントにとって日常に近く、長い時間を過ごす場である。これは見方を変えれば、多様な支援を提供する機会が多いとも言える。実際、教育機関では心理的支援としてカウンセリング以外にも、学生相談室でのグループワーク活動や場の提供、小学校・中学校・高等学校での別室支援や学外適応指導のように、より大きな枠での支援が盛んである。このように、カウンセリングのリジッドな枠が前提として持ちづらい実践の場では、心理的な支援の場は日常の場にも拡大していきやすい。本論では、こうしたカウンセリング以外にも含む、クライアントにとっての心理的な支援につながったり、こころの発達や適応を促したりする営みのことを総じて“心理臨床”と呼称する。そうすると、“心理臨床における枠”とは広く“心理的な支援や、心理学的な成長が起こり得る場を規定する要因”と表現することができる。このように枠の概念をカウンセリングの場から拡大して捉

えた場合、教育機関においては数多くの枠が存在することがわかる。学生相談やスクールカウンセリングの場を始めとして、部活やサークル、研究室や所属するクラス、教員や事務との関わり、そして何より大学や学校はそれ自体が大きな枠であると考えられる。もっと枠を大きく見るとすると、教育機関の外側にあるクライアントの家族やアルバイトも一つの枠を成し、我々が所属する社会や文化も法律など様々な要因によって規定された枠と言えるだろう。もちろん、大きな枠になればなるほど、クライアントの日常に近ければ近いほど、枠の持つ“日常から非日常を切り出す”働きは弱くなるが、まずは心的な活動が起こり得る枠の存在を認識することは必要だろう。

そしてもう一点、教育機関には卒業という時間的な期限があり、カウンセリングの枠としてはスタンダードとは言い難い。しかし、樋口（1981）が学生相談において、卒業のシステムや同年代の青年が集められるその特殊性から、大学という場はイニシエーションのプロセスを促すことを指摘しているように、自分が所属している枠を出るという行為自体が個人にとって創造的に機能し得

る。これは先述した、枠を破る行為に通ずるものであると考えられる。教育機関臨床では、その枠の緩さから現実適応的な対応に徹することも多いが、卒業というイニシエーションを支えることそのものがクライアントにとっての心理的成長を結果的に支援している場合もある。

3. 多層的な枠とカウンセリングの専門性

枠の概念の拡大を行い、教育機関の様相を改めて検討すると、心理臨床における枠は従来論じられてきている“柔軟”な性質を持つだけでなく、“多層的”なものとして捉えられるべきではなからうか。教育機関の中でも大学を例とすると、枠の様相を図1のように表現できる。実際はカウンセリングの枠の捉え方は様々であるため、必ずしもこの通りとは言い難い。ただ、教育機関臨床ではリジットな枠が成立し難い一方で、枠の外側だと思っていたものは、別の枠の内側であるといった多層性が見られ、それと同時に多種多様な枠が存在する。このように考えると、従来リジットな枠が成立し難いがゆえに守りの機能が弱くなるとされてきた構造も、多層的に守られている構造と

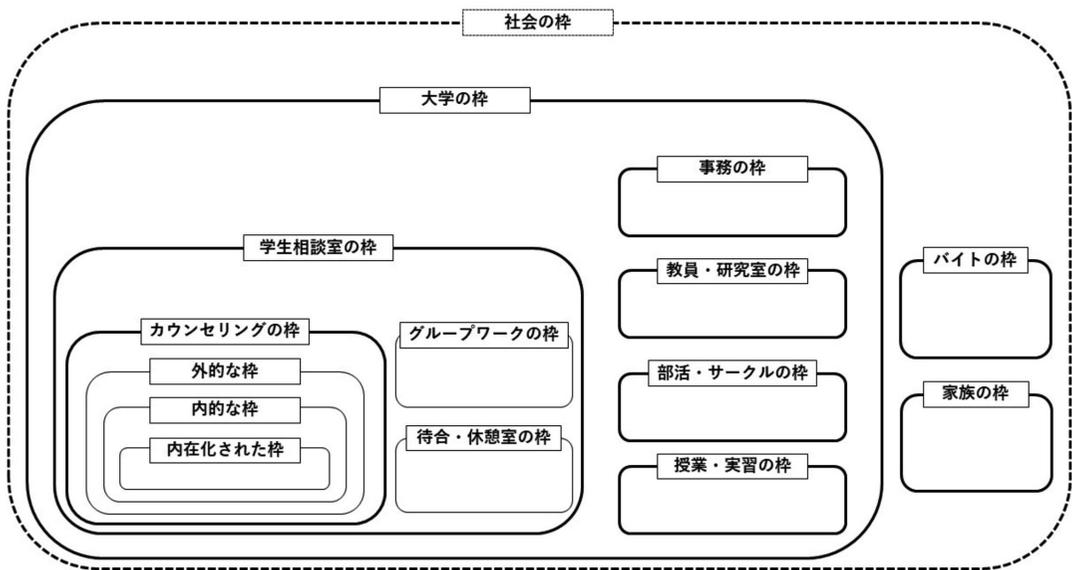


図1 大学における多層的な枠の例

して活用していくことが可能になるかもしれない。教育機関でのカウンセリングにおいて、セラピストとクライアントの双方が守りの弱さを感じている場合、教育機関に存在する枠の様相について把握し、丁寧に共有していくことそのものが、守りの感覚や器の機能を育てていくための糸口になるのではなからうか。

さらに、教育機関においてカウンセリングの枠が最もクライアントの変容や課題の解決に相応しい場合かどうかは、丁寧にアセスメントする必要があるだろう。Hillman (1994) が「1なるものは決して1なるものだけで成立しない。それは常に対立するものと対になっていて、不可分に結びついている」と述べたように、枠の内側と外側は実際には不可分で、クライアントの変容は連鎖的に内から外、外から内へと波及していくと考えられる。つまり、多層的で多様な枠が存在する状況では、カウンセリングの外側にある枠で生じた変化が、カウンセリングの枠内にも波及してくる可能性があり、変容の発端はクライアントの状況に依じたものとなり得る。そうした意味でも、カウンセリングのみが心理学的な変化に貢献しているという感覚を排しておくことが重要と考えられる。

ではここで、教育機関においてカウンセリングという営みが持ちうる独自性や専門性には、どういったものが想定されるのであろうか。第一に、先述したような学生のアセスメントが挙げられるであろう。多数の枠が存在するとはいえ、それぞれの枠にはそれぞれの限界や特殊性が存在する。ただ、学生や教職員が自身でそうした特性を理解したうえで、個人のころにとって有益な枠の選択を行うことは非常に難しいのではなからうか。そこで、心理職の立場から学生の主訴や状態像について心理学的知見を基にアセスメントし、適切な枠でのサポート体制を整えていくことは有意義なことだと考えられる。羽間 (2007) は行動化の傾向が見られるクライアントに対し、あえて学生相談室でのカウンセリングの外的な枠と内的な枠

をリジットに設定したことが、クライアントの安全感を育み心理的成長を促した事例を報告している。学生相談室やスクールカウンセリングの枠は、カウンセリングの専門機関に比べるとリジットなものになりづらいことをここまで述べてきたが、教育機関全体の中で比較すると、心理学的にはリジットな枠を整えやすい場ではある。そうした点を活かして、まずは枠に収まっていくことが重要なクライアントの場合は“柔軟”にリジットな枠を設定するなど、クライアントの状態をアセスメントしつつ他の枠では難しい枠の在り方を能動的に補う姿勢は心理職の専門性だと考えられる。

そして第二に、心理学的な視点の提供が挙げられる。教育機関に属する心理職の職務の主要なものに、コンサルテーションがある。コンサルテーションとは、他職種からの相談に対し、心理学の専門家として助言を行い、その課題に対して間接的な援助を行うことを指す。これは、心理学的な視点の提供とも言い換えることできるだろう。教育機関には、多様な枠があることを述べたが、それらは初めから心理学的に意味のある枠として成立しているわけではない。Kalff (1996/1999) は心理学的な変容が起こるためには「自由であると同時に保護された一つのある空間」を作り出すことが必要であるとしたように、クライアントにとって守られている感覚が共有されていることが心理学的な枠の必要条件となる。そうした条件を心理職の援助なしに達成する場もあるが、それぞれの枠の構成員に空間を見守る専門的な視点を提供することは、学生にとって「自由で保護された空間」に出逢う機会を増やすことにも繋がると考えられる。

第三に、クライアントが枠を内在化するプロセスを支えることが挙げられる。カウンセリングのプロセスにおいて、設定された枠はただクライアントを守ったり表現を促したりするだけのものではなく、そうした枠を体験する中でクライアントが自らのものとして内在化してゆくこと

が重要となる。栗原（1992）は、そうした内在化された枠が移行対象としての機能を持ち、カウンセリングの枠を“卒業”していくうえでも重要なものであるとした。こうした枠の内在化について清水（2015）は、枠の揺れや動き等を通して心理臨床家が主体的にコミットし、クライアントと対話を重ねていくことが必要不可欠であることを述べた。こうした関わりは、主たる業務が心理的な支援とは異なる他の枠ではなかなかできないものであり、カウンセリングのような対話をベースにした枠がそうした役割を担う可能性が高いであろう。

4. 劇としての心理臨床

教育機関における枠が多層的な様相を示すことについて述べたが、それらの枠は多層的であると同時に、枠同士の関係が生じうるものでもある。例えば、図1に示した中でも、学生は家族の枠と大学の枠を行き来することは多いであろうし、保護者と大学側の間で様々なやりとりが生じることはごく自然のことである。ただ、こうした関係性は様々な情緒を伴い、複雑化しこじれることも往々にして起こり得る。教育機関においては、いじめやハラスメントは深刻な課題となっており、その対応をめぐる保護者と教育機関が対立する構造が生じることもある。特に攻撃的な情緒を伴う枠同士の対立においては、当事者は冷静でいることすら難しくなり、まさに心理的なアプローチが難しい場面の一つと言えるだろう。

このような場合、心理職はどのように問題に関わることができるのか。土居（1977）は、カウンセリングを劇としての性質を備えたものとして述べ、そこに生起する情緒やプロセスに身を置きつつ、俯瞰した視点の持つことの重要性を論じている。このように、教育機関における心理臨床でも、その取り巻く状況を劇のように捉えるメタ的な視点は重要ではなかろうか。例えば、いじめやハラスメントの問題に学生が直面し、教育機関の

枠と家族の枠との対立関係が生じた時、学生や保護者にとっては教育機関が悪い対象として捉えられるだろう。ただ、ある集団が“悪い”ものに対峙した際、その集団は心理的なまとまりを得て凝集性を高める（長谷, 2022）ように、家族の枠はこれまでにない一体感を体験する可能性もある。この時、学生を“主人公”、教育機関を“悪役”に据え、劇としてどのような展開が起こっているのかをメタ的に捉えていくことは、その後の支援の可能性に繋がる姿勢になり得る。そうした、視点や姿勢を提供する役割を心理職が担うことも必要かもしれない。ただ、当然心理職自身がそうした“悪役”のような困難な役回りを引き受けることもあり得る。そして、本来であれば、カウンセリングの枠の内側でやり取りが行われることも、教育機関の緩い枠組みにおいて、問題が枠外に拡大する可能性がある。そうした場合、そもそも問題を捉えるために、カンファレンスの場を設けるなどして、心理職が現在置かれる状況を他者と共有し、距離を取り、カウンセリングより大きな枠の中で再度抱え直す試みも重要であると考えられる。このように、対象となる学生が十分に収まることのできる舞台をイメージしながら、枠づくりをしていく視点が求められるのではなかろうか。

V. おわりに一枠を超えて、枠に収まる—

新海誠が監督を務めた『言の葉の庭』という映画作品がある。この映画では、高校生の秋月孝雄と素性を隠した雪野百香里が、孝雄が授業を必ずサボる雨の日の午前だけ庭園で共に時を過ごす中で、それぞれが少しずつ自身の抱えるところの揺れや傷に直面していく。そこでは、時間や季節、場所、雪野の匿名性といった様々な要素によって、まさに2人だけの枠が作り上げられていく。しかし季節が変わり、雪野が孝雄の通う学校の教師であったことが判明すると、これまで2人の場を枠づけていた要素は一気に崩れる。非日常を形成していた枠は破れ、はっきりと日常へと繋がって

く。そして同時に、2人の物語は一気に展開し、雪野が素性を隠していたことへの不満も含め、お互いの気持ちをぶつけ合う。その後、孝雄と学校を辞めた雪野は離れ離れになるが、それぞれが自分らしく人生を歩んでいく様子が描写される。

『言の葉の庭』に描かれたように、時間をかけて形成された枠は一度破られるともとの状態にはそっくりそのまま戻ることにはない、不可逆性を備えたものである。しかし、孝雄と雪野の2人の間に作られた枠は内在化されており、その後の人生を歩む支えになっている。ここで、2人の間で気持ちをぶつけ合う対話のプロセスが介在していることも、枠の内在化に通ずる本質的な出来事だったのであろう。孝雄と雪野が共有していた枠は破られたが、内在化された枠を支えに、2人はそれぞれの新しい枠の中で生きていくことができている。

本論では、枠についての理論をまとめ、教育機関臨床が多層的で多様な枠を有することを論じてきた。スタンダードと異なる枠の在り方は、心理職にとって困難として体験されることも多いが、逆にクライアントとなる学生にとっては多くの枠を体験することのできる場にもなり得るということでもある。その中で心理職が、枠の様相を捉え、クライアントが枠を体験していく過程をいかに支えるか考え続けなければならない。近年では特に、新型コロナウイルス感染症の影響もあって、オンラインカウンセリングが普及する等、これまでの枠の在り方が強制的に破られることも多かった。オンラインカウンセリングでは、実際に同じ空間を共有するわけではない分、当然枠は緩やかになる。そしてこうして破られた枠組みは、感染症の流行が収まったとして、そっくりそのまま元に戻ることはないだろう。そうした枠の変容のタイミングにあるからこそ、我々心理職は従来の枠を再度見直し、内在化していく必要があるのではなかろうか。各々が自らのところに従来の枠の意義を刻むことで、ちょうど孝雄や雪野のように新しい

枠に取り組むことができるのかもしれない。教育機関での心理臨床は、そうした枠への姿勢の重要さを日々教えてくれる場のように筆者には感じられる。

註

- 1) 公認心理師法第2条2項『心理に関する支援を要する者に対し、その心理に関する相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと。』
- 2) 「治療構造」(小此木,1990)と呼ばれることもあるが、治療構造という言葉が精神分析用語として医学領域で発生したことを踏まえ、本論ではより汎用性のあるものとして「枠」と呼称する。
- 3) 臨床心理士資格の登録者数は2022年3月末時点で39,576人。
- 4) 公認心理師法第42条『公認心理師は、その業務を行うに当たっては、その担当する者に対し、保健医療、福祉、教育等が密接な連携の下で総合的かつ適切に提供されるよう、これらを提供する者その他の関係者等との連携を保たなければならない。』
- 5) 軸木のついた木の枠を回転させて、糸を巻き取る道具のこと。

文 献

- 土居健郎 1977 方法としての面接 医学書院
- Freud, S. 1918 Weg der Psychoanalytischen Therapie (小此木啓吾訳 1970 精神分析療法の道 日本教文社)
- 羽間京子 2007 攻撃的な言動をとる学生との面接過程一抱えることと制限をめぐって— 学生相談研究 27 227-237
- Hillman, J. 1994 Healing fiction. Spring publication
- 樋口和彦 1981 ポスト・スチューデント時代 笠原嘉・山田和夫編 キャンパスの症候群—現代学生の不安と葛藤 弘文堂 253-283
- 伊藤直樹 2017 学生相談カウンセラーの専門性形成過程における「難しさ」 心理臨床学研究 35(4) 376-386
- Jung, C. G. 1937 The realities of practical psychotherapy (横山博監訳 2018 心理療法の実践みすず書房)
- Jung, C. G. 1944 Psychologie und Alchemie (池田紘一・鎌田道生訳 1976 心理学と錬金術 I 人文書院)
- 皆藤章 1994 風景構成法—その基礎と実践 誠信書房
- 皆藤章 2007 心理療法の方法 皆藤章編 よくわかる心理療法 ミネルヴァ書房 38-39

- Kalff, D. 1996 *Sandspiel : Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche* Ernst Reinhardt Verlag, München/Basel (山中康裕監訳 1999 カルフ箱庭療法 誠信書房)
- 河合隼雄 1999 日本人と心理療法—心理療法の本① 講談社
- 河合俊雄 2013 心理療法という場と主体性 河合俊雄編 ユング派心理療法 ミネルヴァ書房 3-17
- 小島謙一 2012 古英語辞典 大学書林
- 神代末人 2015 スクールカウンセラーの治療構造をめぐる体験の検討—M-GTAによるSCの語りの分析— 京都大学大学院教育学研究科紀要 61 25-37
- 栗原和彦 1992 治療構造論 氏原寛・成田善弘・東山紘久・亀口憲治・山中康裕編 心理臨床大事典 培風館 233-236
- Leach, E. 1961 *Two essays concerning the symbolic representation of time* The Athlone Press 124-136
- 三浦亜子 2020 学生相談室の可能性—大学の中の隠れた宝 山王教育研究所編 セラピストの主体性とコミットメント 心理臨床の基底部で動くもの 創元社 127-140
- 森谷寛之 1983 枠づけ効果に関する実験的研究—バウム・テストを利用して— 教育心理学研究 31(1) 53-58
- 茂木洋 2002 福祉心理臨床における「枠」 四天王寺国際仏教大学紀要 35 1-9
- 村瀬嘉代子 1981 子どもの精神療法における治療的な展開—目標と終結 白橋宏一郎・小倉清編 児童精神科臨床2 治療関係の成立と展開 星和書店 19-52
- 長谷雄太 2022 現代において悪と出逢うということ—集団という状況下での“個”の営みに着目して— 京都大学大学院教育学研究科紀要 68 81-94
- 中井久夫 1974 枠づけ法覚え書 芸術療法5 15-19
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫・柏野和佳子・星野和子・丸山直子 2019 岩波国語辞典 第8版 岩波書店
- 岡野憲一郎 2008 治療的柔構造—心理療法の諸理論と実践との架け橋 岩崎学術出版
- 小此木啓吾 1990 治療構造論序説 岩崎徹也他 編 治療構造論 岩崎学術出版社 1-44
- 齋藤憲司 2002 学生相談の柔構造を規定するシステムとスタイル—日々の相談活動への事例的考察から— 学生相談研究 23(1) 1-9
- 坂井友美・松下姫歌 2009 *Holding*の観点からみた心理臨床面接における枠の機能 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 8 78-86
- 清水亜紀子 2015 内的面接枠の創造の意義「甘え甘やかす関係」が生じた心理臨床面接の検討を通して 心理臨床学研究 33(2) 150-160
- 白川静 2000 白川静著作集3 漢字Ⅲ 平凡社
- 田嶋誠一 2003 イメージの心理臨床総論 田嶋誠一編 臨床心理面接技法2 誠信書房 269-308
- 田中恒彦 2021 「構造」しかない認知行動療法 上田勝久編 問いからはじまる面接構造論 臨床心理学 21(3) 金剛出版 278-282
- 鐘幹八郎 1998 精神分析的心理療法の手引き 誠信書房
- 鐘幹八郎・名島潤慈 2000 新版心理臨床家の手引き 誠信書房
- 上田勝久 2020 個人療法論再考 第6回 セッションの頻度をめぐって 精神療法 46(5) 855-862
- 山口昌男 1969 道化の民俗学(2) 文学2月号 岩波書店 52-66
- 山木允子 1990 大学学生相談室における精神療法 岩崎徹也編 治療構造論 岩崎学術出版 490-505
- 山崎孝明 2021 治療構造論を更新する—認識論から主体化へ 上田勝久編 問いからはじまる面接構造論 臨床心理学 21(3) 金剛出版 266-272

ABSTRACT

The Multilayered Nature of Psychological Frames and Their Relationships in Psychological Clinical Practice: Through Clinical Work at Educational Institutions

NAGATANI, Yuta

Konan University

In this paper, we summarize theories about psychological frames from the perspective of clinical psychology, and examine how frames should be and are perceived, focusing on clinical activities in educational institutions, where it is difficult to have a standard frame. Although the structure of psychological frames tends to be loose in educational institutions, it was found that by expanding the conventional concept of frames, they are multi-layered and various kinds. In psychological practice in educational institutions, it is important for psychotherapists to complement psychological frames are difficult for other professions, to provide psychological perspectives for free and protected spaces, and to support the creation of internal frames in counseling. And it was suggested that viewing educational institutions as “stages” is useful for understanding complex psychological dynamics.

Key Words : psychological frame, multilayered nature, educational institutions
